〈研究論文〉

東海大学健康科学部
紀要第5号1999
(2000年3月1日発行)

社会情緒的発達と言語認知的発達をつなぐもの

― 自閉症の関係障害臨床 ―

小林　隆児*

Bridging the Divide Between Socio-Emotional and Linguistic-Cognitive Development: From the Viewpoint of Relationship Disturbances

Ryuji KOBAYASHI

自閉症の原因をめぐる議論は、これまで内因、心因、器質因と変遷を遂げてきた。今日では器質因論を中心に展開しているが、いまだ社会情緒的障害（対人関係障害）と言語認知的障害のどちらが一義的か、さらには両者がどのような関連性を持つかについて定説はない。本稿では筆者の依って立つ関係障害臨床の立場から、社会情緒的発達と言語認知的発達の関連性について理論的仮説を提示した。理論的仮説の前提として、①自閉症の主要な病態を養育者との間でのコミュニケーションの成立過程の問題とみなすこと、②自閉症の原因に迫るためには、言語認知機能の獲得過程についての詳細な検討が必要であること、③そのためには関係障害臨床の視点に立ち、子どもと養育者の関係障害に対する治療介入を通して、当事者双方の内的世界（主観）にまで踏み込むことが重要であること、④それは関与しながらの観察によって初めて可能になること、などを指摘した。そのことを踏まえ、コミュニケーションの成立過程を、愛着、知覚、情動、認知などの鍵概念を用いながら、それらが関係性の変容過程とどのように絡み合って展開していくかを論じた。

key words：autism, intersubjectivity, linguistic-cognitive development, relationship disturbance, socio-emotional development

I　緒　　言

東海大学健康科学部創設と同時に、われわれは同学部に Mother-Infant Unit（母子治療室）を設置し、臨床研究活動を開始した（小林ら，1997b)。そこではこれまで子ども自身の個体能力障害とみなされてきた発達障害、とりわけ養育者との間でのコミュニケーションに深刻な問題を有する自閉症ないしはその近縁の病態（自閉症圏障害 autistic spectrum disorders）を示す乳幼児を、養育者との関係障害という視点に立って、早期介入を実践してきた。

これまでにもその研究活動の一部については報告してきたが（小林、1998；小林、1999；小林、印刷中；小林ら、1997a)、本稿では関係障害臨床というわれわれの臨床活動の依って立つ理論的基盤について論じたい。とりわけ、これまで自閉症原因論の変遷の中で論じられてきた心因論と器質因論の主要な論争点となってきた社会情緒的発達と言語認知的発達の関連性に焦点を当て、両者をつなぐものは何かを論じてみたい。

＊東海大学　健康科学部　社会福祉学科

II　自閉症の原因論

1．自閉症原因論の時代的変遷

自閉症の原因を巡ってこれまで内因論から心因（環境因）論へ、さらには今日では器質因論へと議論が展開してきた。最近まで器質因論の代表であった言語認知障害仮説を多くの研究者が支持してきた。自閉症にみられる対人関係障害（自閉性）は言語認知障害の結果の産物であるとし、言語認知障害が一次的障害とみなされ、その基盤に何らかの脳障害の存在が仮定され、これまで膨大な生物学的研究の知見が蓄積されてきた。しかし、最近では社会情緒的発達と言語認知的発達の関連性はこれまで考えられてきたようには単純化できないこともわかっ

てきた（Dawson, 1989）。

自閉症の原因にまつわるこれまでの議論は、社会情緒的障害と言語認知的障害のどちらをより一次的に考えるか、という問題ともいえるが、これまでの国際的議論は、当時主流となっていた科学的接近方法に大きく依拠してきた。精神医学の世界で、心因論が叫ばれた時代には力動的精神医学が隆盛を誇っていたし、器質論が強調され始めた今日では、生物学的精神医学や脳科学研究が台頭している。つまりはその時代の研究の枠組みに強く影響を受けながら自閉症の原因論も変遷を遂げてきているのである。自閉症研究だけがまったくその時代の科学の大きな流れと異なった次元にあることなど考えられないことから、このことはきわめて当然の成り行きであるともいえる。

2．器質因論に対する疑問

これまで自閉症の器質因として多様な中枢神経系の異常が指摘されてきた。自閉症における脳機能の基本的障害についてもいくつかの仮説が主張されている。これらの仮説を検証するに当たって重要なことは、一定の発達年齢に達した自閉症児を対象とした生物学的研究においてなんらかの器質的異常所見が見つかったにしろ、それが自閉症の成り立ちを決定づけるものか否かの判断はあくまで慎重でなくてはならないということである。これまでに報告された脳障害を示唆する所見の多くは、対象児の発達過程を考慮せず、現在の認知障害像との関連で短絡的な因果関係が論じられている。つまりは、脳のなんらかの変化と心理学的特徴とを関連づけているが、脳に見いだされた所見は、心理学的異常の原因なのか、単に結果にすぎないのかは実は明らかにされていないのである。感覚遮断状態により中枢神経系の発達が阻害されるということは神経学の領域ではよく知られている（Kandel & Jessell, 1991）。中枢神経系は、その成熟過程において常に環境の影響なくしては達成しえないという開放系の組織であることが知られている（松本, 1996）。

われわれに今切実に求められているのは、発達過程を無視した単純な因果論でもって自閉症の成因を論じることではなく、種々の要因がどのように関連し合いながら、発達過程が進展していくかを治療的関与の中で実証的に検討していくことである。

III　関係障害臨床

1．関係障害

心因論にしろ、器質因論にしろ、これまで自閉症の病態は、個体能力の問題として捉えられ、原因を環境か個体か、そのどちらかに特定化しようとする接近方法が試みられてきた。筆者は自閉症にみられる病態を、コミュニケーションの当事者である子どもとその養育者（あるいは治療者、療育者も含めて）との関係障害 relationship disturbances（Sameroff & Emde, 1989）として捉え、治療介入を実践している。つまり自閉症にみられる対人関係の障害をコミュニケーション形成過程における問題とみなし、母子間（あるいは子どもと療育者の間で）のコミュニケーションの成立を目指した治療介入を試みている。そこでは子どもの病態（ここではとくにコミュニケーションに関する問題を指しているが）を個体能力の障害とはみなさず、気質などの子どもの個体側の要因（素質型 genotype）と、養育者や療育者の関与のあり方などの環境側の要因（環境型 environtype）との間での複雑な交互作用によってもたらされた結果（表現型 phenotype）として、子どもの現在の状態が表現されているものとみなしている（Sameroff, 1993）。

2．関与しながらの観察

自閉症の病態を関係障害とみなす際に重要となるのは、関係のあり方を力動的に捉えることである。この問題に深く切り込んでいくためには、両者の関連性、すなわち実際の子どもと養育者ないしは治療者（療育者、保育者など）との関係性の有り様をリアルにとらえ、そこでどのような交流場面が展開しているか、その交流の蓄積の中で両者、すなわち社会情緒的発達と言語認知発達が具体的にどう展開しているかを、可能な限り実態を伴ったものとして把握していくことが求められる。

その意味から、関係障害臨床においては、治療者は必ず両者（ここでは子どもとその養育者）とともに治療の場に居合わせ、そこで治療介入を行っている。関係性の変容過程の実態を生き生きとしたものとして把握するためには、行動水準のみの相互作用の把握ではなく、当事者双方の主観の世界にまで深く分け入っていくことが不可欠であり、当事者の主観の世界を間主観的に感じ取るためには当事者とともにその場に介在する必要がある。このことはこれまで関与しながらの観察 participant observation（Sullivan, 1953）といわれてきた。

IV　行動と主観

これまで対人関係の問題に接近する際に、当然のことながらそこで展開している対人相互作用に注目が集まっていた。しかし、その際当事者の主観の世界にまで踏み

東海大学健康科学部
紀要第5号1999
(2000年3月1日発行)

込むことは行われなかった。なぜなら人間の心の世界は主観的な事柄であって、科学的接近にはなじまないということが大きな理由であった。行動次元のみが客観的な事柄であると考えられたために、誰の目から見ても把握可能な行動に限定するという禁欲的な態度を研究者は敢えて取ってきたように思える。

行動は人間と人間の関係を成り立たせている媒介としての役割を果たしている。人間は各々自己固有の内的世界（主観的世界）を持っているが、何らかの心の動きが生じると、それは行動を引き起こす動因（意図）となって必ず何らかの行動が表出される。するとその場に居合わせた人間はその行動を知覚し、なんらかの意味をそこに見出し、なんらかの形で反応することになる。ここで他者の行動に何らかの意味を見出す過程は、当事者の主観的世界での営みである。つまりは、このような二者関係において行動を発する側の意図、行動を知覚する側の意味づけはともに主観的な営みである。

実は行動それ自体も客観的なものではない（松本，1996)。ある人間から発せられた行動は、発する側の主体の意図によって多様な意味を持ち得るし、その行動を知覚する側の主体の受け止め方次第でこれまた実に多様な意味づけが行われる可能性がある。つまりは、行動自体もその場で関与する当事者の主観の有り様によってその意味はいかようにも変容しうることを意味している。行動自体も主観的なものといえる。このように考えていくと、行動の意味を検討する際には、その行動を取り巻く文脈 context (関係性の質とでもいえようか) をリアルに捉え、当事者の主観的世界に分け入ることが不可欠であることに気づく。

V　コミュニケーションの構造を考える

つぎに、行動の意味を規定する関係性の質を検討することにしよう。ここでは関係性という用語の代わりに「コミュニケーション」という用語を用いる。ここで用いる「コミュニケーション」は、存在するお互いの一方が他方に何らかの影響を及ぼすこと、と定義する。

1．コミュニケーションの二重構造

コミュニケーションには情報の授受という象徴水準の他に、気持ちが通底するという情動水準のコミュニケーションがある。象徴水準ではインターネットに代表されるように情報が一方から他方へと双方向性をもち、かつ時差を伴って周辺に伝わっていく。しかし、情動水準のそれは、ちょうど同じ振動数の音叉をふたつ並べて、一方の音叉を振動すると、他方の音叉も同じように共振する現象と似通っているとされている。すなわち、情動の世界では当事者双方が身体そのものでもって共鳴し合うような性質をもち、かつ同時的なものであるという。図1はこのようなコミュニケーションの二重構造を示したものである。

2．コミュニケーションの構造とずれ

AとBの二者におけるコミュニケーション構造を想定してみよう(図2)。AがBに何かを伝えたい、わかってもらいたいという気持ち（意図ないし動因）が高まると、Aはなんらかの言動（ことばや行動）を起こす。その言動をBは受け止めて、そこになんらかの意味を読みとり、Aの伝えたいことを理解しようとする。ふたりともことばを用いることに問題がない場合には、一般にこのようなコミュニケーションの構造を想定することができよう。ただ、ここでAの心に生じたコミュニケーションの意図とAの実際に発した言動との間には、必ず多少なりともずれが生じる。自分が相手に伝えたいというなんらかのイメージを、主にことばによって伝えようとするが、自分の心の中に浮かんだイメージをことばによって表現すること自体なかなか難しいことである。自分の伝えたいことをそのままの形で伝えることがどんなに大変なことか、誰しも日頃痛感するところである。

またAが用いたことばに対して自分で抱くイメージとBがそのことばを受け止める際に心に浮かべるイメージは、けっして同一ではない。勿論、同じ言語を用いている国民同士であれば、共通の文化的体験を積み重ねていることが多いので、ことばによるコミュニケーションが可能になるのであるが、そこにおいてもことばに対するイメージの微妙なずれによって、コミュニケーションにおける様々なずれは起こりうる。このようなずれは、コミュニケーションそのものに本質的に存在するものであって、コミュニケーションにずれが起こること自体が病理的ということではない。

同じ言語をある程度自由に操れる人間同士の間でも、コミュニケーションのずれが多少なりとも必ず生じるものだとすれば、ことばが自由に操れない、ないしはまったくことばを用いることができない子どもとわれわれ(養育者、治療者、療育者など)の間でのコミュニケーションの難しさは想像に難くない。ただ、ここで重要なことは、本質的にずれをもたらす構造をもっているコミュニケーションにおいて、そのずれを少なく、ないしはなくすための機能が情動水準のコミュニケーションに存在する。ある情動（快/不快、喜/怒、哀/楽など）が一方に

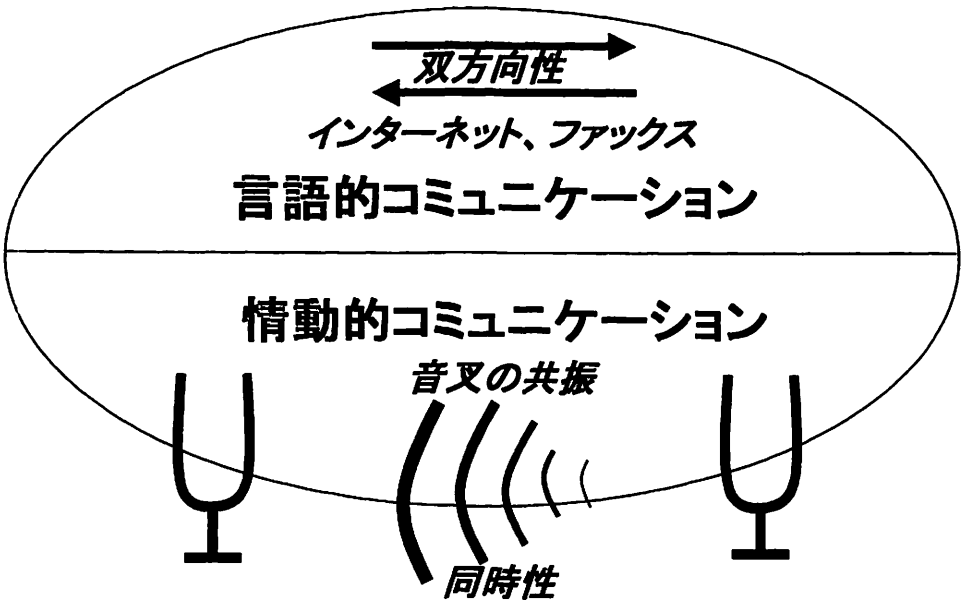

図1　コミュニケーションの二重性

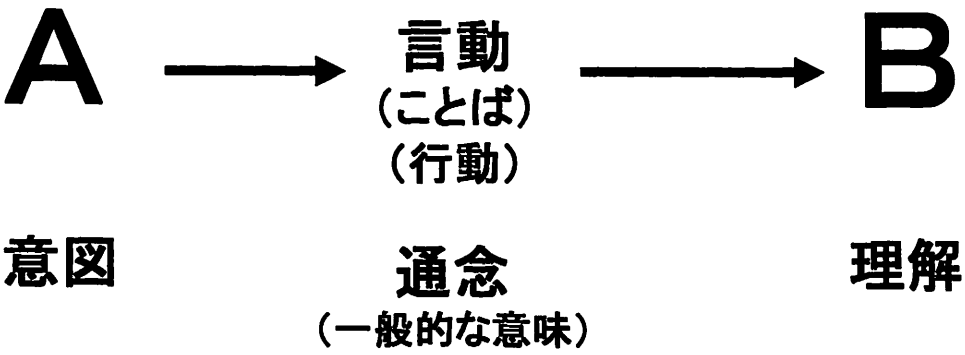

図2　コミュニケーションにおける意図、言動、理解

生じると他方にもその情動が共振することによって両者はその情動を分かち合うことになる。このようなコミュニケーションの世界では、両者間に共有された情動は同質のものであるといえよう。コミュニケーションのずれが日頃は深刻な問題とならないのは、情動的コミュニケーションの働きによるところが大きい。

3．情動的コミュニケーションと無様式知覚

コミュニケーションの基盤を形成している情動的コミュニケーションを二者間で可能にしているのは無様式知覚の機能に負うところが大きい。無様式知覚には、生命をもたないものでもあたかも生き物であるかのように知覚する相貌的知覚（Werner, 1946）と、あらゆる刺激について、特にそれがもつリズム、大小、強弱などの動きの変化を敏感に捉える力動感 vitality affects（Stern, 1985）がよく知られている。われわれには視覚的刺激とみなされるような光刺激であろうと、聴覚的刺激とみなされるような音刺激であろうと、触覚的刺激とみなされるような皮膚刺激であろうと、その刺激がもつ強弱、大小、リズムなどの動きの変化を鋭敏に知覚することをいう。たとえば、ある人が話しかけた際に、その話された内容にではなく、自分の心に土足で踏み込んでくるようなとげとげしさに鋭く反応するような知覚のあり方をさす。

4．知覚現象は間主観的現象である

先に述べた知覚の働きは、人間の知覚機能でいえば、きわめて未分化な段階の知覚であるが、われわれ大人であっても実はこのような未分化な知覚は日頃意識しないだけであって、いつまでも深く浸透してわれわれの知覚

東海大学健康科学部
紀要第5号1999
(2000年3月1日発行)

機能の基盤を形成している。特に、大変な恐怖や不安にさらされるような状態に置かれると、このような無様式知覚が活発に働き始める。たとえば、ストーカーに付け狙われ、夜ひとりで部屋にいる時に、突然鳴った電話の音は、その人にとって自分の心の中に侵入してくるエイリアンのような恐ろしい響きをもって心に響いてくるであろう。このような時の電話の音は、単に聴覚的刺激としてその人に客観的に知覚されているのではなく、強い不安状態であることによって、いつもの電話の音とは全く異なった様相を伴って飛び込んできている。このように人間にとって知覚現象自体、実はけっして客観的な現象ではなく、知覚する主体の心理的ないしは生理的状態如何によって容易に変容を遂げるという性質を有している。すなわち知覚現象は本来間主観的現象といえるものである（鯨岡，1986)。

Ⅵ　愛着、無様式知覚、情動的コミュニケーション

未分化な段階の知覚である無様式知覚は、知覚する主体の生理的ないしは心理的状態如何によって容易に変容することを述べたが、このことは実は人間にとって非常に重大な意味を持っている。

ここでもし愛着形成が困難な場合、そこでの乳幼児の知覚体験世界はどのようなものかを想像してみることにしよう。いつも不安・緊張・恐怖に包まれているならば、外的刺激は常に主体には侵入的で、まるで迫害的な色彩さえ帯びながら飛び込んでくるとでもいえようか。主体の心（身体）が強く萎縮している状態にあれば、外的刺激は非常に強い動きの変化を伴って主体の中に飛び込んでくるであろう。押し相撲の相手に対して引き技を出してしまった時、一気呵成に押し込まれて吹っ飛んでしまう相撲取りを想像してみたらいいかもしれない。

もしも豊かな愛着が親子の間で形成された乳幼児であれば、外的刺激は彼らにとっていかなる刺激であろうと、相貌性を帯び、彼らの好奇心を駆り立てるような実に快適な色彩を帯びたものになる。健康な乳幼児が周囲の事象に対して豊かな好奇心を示す姿を想像できよう。その意味で愛着対象の存在は乳幼児が外界を知覚する際に決定的な重要性をもつ。

では乳児や自閉性障害を有する子どもたちのように、自分の環境世界の（文化的）意味をいまだほとんど知らない存在が、どのようにしてその意味を獲得することが可能になっていくのであろうか。

Ⅶ　認知機能の獲得過程

1．知覚と認知

ある対象または事象がどのような意味を持つかを判断する精神機能は認知と称されている。認知とは知覚されたものを意味づける精神の営みである。意味づけるとは、われわれが生きている社会で、同じ文化を有する者にとってのその対象または事象に共通の意味を付与することである。つまり、認知とは極めて文化的な営みである。したがって認知機能の獲得のためには、対人交流の蓄積が不可欠である。認知機能が中枢神経系における高次精神機能を指し、中枢神経系の成熟を抜きにしては考えられないが、中枢神経系の成熟過程そのものも社会的刺激、すなわち対人交流の蓄積との交互作用の欠如した環境ではありえない。中枢神経系の成熟過程と対人交流は相互補完的関係にある。

2．抽象化、概念化

われわれは通常身のまわりの事物、事象に対して言語という精神機能（話しことば、書きことばなど）を用いて理解したり、相手にある考え（観念）を伝えている。しかし、日常われわれが主に身体の五感を通して知覚した事物や事象をありのままに理解したり相手に伝えているかというとけっしてそうではない。世の中のあらゆる事物、事象にはどれひとつとして同一なものなど存在しない。たとえば「りんご」のひとつひとつがその形態、色調、味覚など（これらの性質をその対象のもつ属性と称している）で微妙に異なっている。そこでわれわれはさまざまな「りんご」のなかで共通したある属性を取り出してどれも同じ「りんご」であるといつの間にか認識するようになる。このような精神機能は「抽象化」ないし「概念化」と称されている。このように事物のなんらかの特徴が捉えられて抽象化され、それが言語という媒介を通して相手に伝えられているのである。このような手続きを経て初めて人間相互間に言語を用いたコミュニケーションが可能になっていく。

では、このような抽象化ないし概念化は人間にとってどのようなプロセスを経て可能になっていくのであろうか。このテーマを検討してゆこうとすると、そもそも人間の発達的諸機能は子どもが生まれた時にはすでに生得的に獲得されているものなのか、それとも生後になんらかの外在的な（有機体外の）手段によって獲得されていくのかというきわめて根源的な問題に突き当たらざるをえない(Kaye, 1982)。今日の乳幼児心理学研究において、

ヒトは生誕時にはすでに多くの機能を有しているとされているが、人間本来の機能とされるコミュニケーション能力を獲得するためには、母親を初めとした対人交流を乳児期早期から蓄積することが不可欠であることがしだいにわかってきた。

「抽象化」や「概念化」という心的プロセスは、ある程度その対象の物質的あり方や知覚機能の生物学的基盤に規定される側面はあるにしろ、ある意味で個体側の恣意に属している。したがって、物事をどう認知するのが正しいとは一概にいえない。ただわれわれは共同社会のなかでお互いに共通な文化的背景をもっているがために、暗黙のうちに共通の認識（認知）をもつようになっているのである。よってわれわれは子どもを育てるさいに、意識するしないにかかわらず、共同社会で培われてきた文化を背負った存在として接し、子どもは大人たちとの密接な対人交流を通して物事の認識の仕方をおのずと習得していく。このように認知の発達過程はその基盤に脳機能という生物学的基盤を有しているにしろ、誕生後の多くの人々との対人交流を通して初めて進展していくものであるということができる(村瀬, 1983；滝川, 1995)。

Ⅷ　子どもの心と養育者の心をつなぐもの

1．間身体性、間情動性、間主観性

われわれの身体は、けっして自己完結的な存在ではない。先に述べた情動的コミュニケーションを可能にする情動の共振現象に示されているように、情動を司る脳をはじめとする身体そのものは、人間相互間で共振しあうという機能を有している(Condon, 1989)。このような相互に共振し合うような現象は哲学の世界では間身体性と称されている(鯨岡, 1997)。同じように情動も相互間で共振し合うというように間情動性が成立するが、こうした間身体性や間情動性を基盤にして人間相互間で間主観性が成立していく。

間主観性は、第一次間主観性（Trevarthen, 1979）と第二次間主観性（Trevarthen & Hubley, 1978）に分けられている。第一次間主観性は、生後数ヶ月の乳児と養育者との間で、養育者があやすと思わず乳児も微笑むようにして相互間で心地よい気持ちが通じ合う関係が成立するようになる。このような関係性を第一次間主観性の成立とよぶ。間身体性、間情動性の成立段階ともいえよう。

第二次間主観性は生後７～８ヶ月頃から乳児と養育者との間で、ある対象に対する関心を相互に共有することができるようになる関係性の成立をさす。第二次間主観性は３項関係ともいわれるもので、両者間である対象を巡って関心を分かち合うことが可能になることでもって、子どもが世界に関心を向け、その世界の事象や対象に対して養育者は子どもの関心を共有することが可能になっていく。ここで本来の間主観性が成立していくといえよう。

2．意図の共有

第二次間主観性の成立が子どもの言語獲得過程において果たす役割は決定的に重要な意味をもつ。そこでは子どもがある対象に対してどのような点に興味を抱いているか、それが養育者との間で容易に共有されるようになっていく。共同注視 joint visual attention ともいわれる段階を示している。

たとえば、遊戯療法室にあるトランポリン（と言われている対象物）に子どもが興味関心を示したとしよう。通常の子どもであれば、それを見たらその上に乗って飛び跳ねようとする。その時の子どもの対象認知は、そのような働きをもつ物であるという対象物の属性を認識しているからこそ、そのようにして遊び始める。しかし、もし自閉性障害を持つある子どもが、トランポリンの表面の網の目模様に魅入ってじっと見続けているとしよう。われわれにとっては当然こうして用いると認識している物に対して、それとはまったく異なった点（属性）に興味を抱き、その物と関係を持つことは自閉性障害を持つ子どもで実に多い。この時の対象物はこの子にとってはトランポリンではない。光に当たって微妙に変化をもたらす表面の網の目の幾何学的模様がその子の心を捉えて離さない。このような時にわれわれはこの子にどのように関与したらよいのであろうか。ある養育者は、トランポリンの上に子どもを乗せて一緒に飛び跳ねようと働きかけるかもしれない。ある養育者はそんなことをしていても面白くないだろうからと、他のことに興味を逸らそうとするかもしれないし、どうしてこんなことばかりするのだろうと嘆き悲しむかもしれない。またある養育者はその子と一緒になって同じ目の高さまでしゃがみこんで網の目の幾何学模様のおもしろさを発見して子どもと一緒に心動かされるかもしれない。

ここで大切なことは、子どもがその対象物のどのような属性に心を奪われているか、すなわち子どもの関心や行動の意図をわれわれも共有することによってしか、その対象物の（その子にとっての）文化的意味は子どもに伝えることはできないということである。たとえその時の子どもの取っている行動がわれわれには奇異に思えたとしても、その子どもにわれわれがともに生きている世

東海大学健康科学部
紀要第5号1999
(2000年3月1日発行)

界でその物のもつ文化的意味を体得してもらいたいと願えば、子どもの関心に沿って働きかけなければ、われわれの願いは果たせないことになる。勿論、トランポリンとしての使い方を強引に教えようとするやり方を取ろうとする養育者（ないしは治療者）もいるであろう。もしそうであるとするながら、その時の子どもの関心はだれにも分かち合ってもらうことなく、相手の関心（心的世界）に強引に誘い込まれてしまうという体験を味わうことになろう。その時はおとなしくつきあう子どももいようが、大半の子どもではなんらかの激しい情緒的反応を示すであろう。

筆者はけっしてある養育者（ないし治療者）が非人道的であるとして非難しようとしているのではない。ある状況に置かれると大半の大人はこれと大差ない接近を自閉性障害をもつ子どもにとりやすいのである。そこに自閉症治療の困難さがある。

3．愛着形成と意図の共有

先に述べたような望ましい関係が比較的容易に成立するためには、ぜひとも両者間で愛着が形成されていかなければない。愛着形成によって情動的コミュニケーションが容易に成立することは先に示したが、同時に愛着形成は、養育者の子どもに対するイメージを劇的に変化させるのである。一言で言えば、「かわいさ」が募るとでもいえようか。勿論、情動的コミュニケーションの成立していない状態での養育者の子どもに対する思いは、けっして「かわいさ」がないというのではない。しかし、たとえ多少なりとも「かわいさ」が感じられようと、この子は異常ではないか、親を困らせることばかりして困るなど、どうしても親に不快感ないしは不安感をもたらすような行動をとってしまう。だれでもそのような思いを抱かざるを得ないであろう。理性では子どもを「かわいい」と思いたくても、どうしても「かわいくない」という気持ちが生まれてくるのが一般的であろう。親も生身の人間なのである。

かわいさが子どもに対してますます高まることによって、親は子どもに対して「成り込み」やすくなる。「成り込み」（鯨岡, 1997）とは、子どものある心的状態に親も焦点を合わせ、子どもの心のありようをまるで自分が子どもになったかのようにして相手をする状態をさすが、このことが子どもの心の状態に文化的意味（意味づけ）を付与する際に極めて重要な心理的営みである。

4．無様式知覚と言語－活動性輪郭と音声輪郭

社会情緒的発達の促進は、愛着形成を基盤にして安全基地が育まれ、それを基盤にして二者関係、三者関係、さらには不特定多数の対人関係へと進展していく。

愛着形成によって、子どもと養育者の二者関係が深まっていくと、そこには次第に第一次間主観性、さらには第二次間主観性が成立していく。

第一次間主観性が成立すると、子どもと養育者との間で容易に両者の情動や意図が通底するようになっていく。そのような関係性のもとに子どもは能動的に環境世界との関係を展開していくのであるが、そこにおいて子どもの遊びに養育者はともに存在していることによって、子どもの体験は養育者との関わりのもとに蓄積されていく。その際、養育者は暗黙のうちに、子どもの体験世界を文化的枠組みの中で捉えて、発語（言語化）ないしことばかけという行為を行っている。たとえば、子どもが滑り台を楽しそうに滑っているのをそばで見ている養育者は、まるで自分も滑っているかのようにイメージの世界で子どもと同じ遊びの体験をしながら、すべっている子どもの気分に合わせて、子どもの気持ちがもっとも盛り上がる瞬間に威勢良く声を発するようになる。これこそまさに「成り込み」のなせる技であるが、このような養育者の発声行動をNewson (1979) はvocal markerと称し、子どもにとってもっとも面白い瞬間を発声により際立たせ、両者のコミュニケーションを促進する役割を担っているという。実は子どもがその時に身体でもって情動的に体験している体験様式は、無様式知覚の世界ではvitality affectとされ、そこでの身体で体験されている知覚体験は、包括的で、動きの変化をもっとも敏感に知覚している。その体験内容は活動性輪郭activation contour（Stern, 1985）と称されているが、この活動性輪郭と同型の発声行動が養育者によって行われている。そこでの養育者の発声のもつ輪郭vocal contourも実は子どもが身体でもって体験している活動性輪郭と同型であることがことのほか重要な意味を持つ。子どもの身体を通した体験と養育者の発する発声（擬態語といったある種の言語活動であるが）との間には共通の輪郭が生じている。このように身体で感じ取った知覚体験と音声を通して知覚された体験は、一見異なった質の体験であるようにみえるが、このような異なった性質を持つふたつの知覚体験の中で共通の輪郭（属性）を取り出す作業の中に、抽象化の原型ともいえる営みを発見することができる(Stern, 1985)。さらに子どもが自らの身体でもって体験する際に、情動がともに揺さぶられ、多くの場合、快適な情動が子どもに引き起こされる。この快適な情動によって脳はもっとも活性化されるという(松本, 1996)。乳児早期からこのような体験を子どもは

養育者とともにいることによって自己の体験は次第に言語化されて蓄積されていく。このようにして自己イメージ、ないしは自己の体験の文化的意味を体得していくことになるのであろう。

ここでぜひとも強調しておく必要があるのは、養育者との間でまずもって身体水準でもって共振するような関係性が成立していることが重要であるということである。そうした間身体性の成立によって子どもの動きに養育者の身体も共振し、そこでは必然的に伴う情動の変化をも両者間で共有されるという、間情動性、間主観性の成立がもたらされる。このようにして、子どもの体験が次第に我々の依って立つ文化的意味世界に投げ出され、次第に言語機能の獲得へとつながっていくのである。

IX 結　語

本稿では詳細は論じることができなかったが、社会性の発達は、最初の二者関係から出発し、次第に不特定多数の他者との関係へと広がっていくが、その過程と言語認知機能の基盤となる知覚機能の分化とは密接に関連し合っている。すなわち、二者関係においては本来ことばの獲得は必要としない世界であって、三者関係、そして不特定多数の関係へと広がることと、ことばの獲得の必要性は不可分につながっている。二者関係の成立が未分化な知覚機能に大きく依拠していることはきわめて必然的な結果であって、未分化な知覚機能を示す自閉性障害の子どもの状態をわれわれとは異なった異常な病態であると一方的にみなすことは、彼らとわれわれとのコミュニケーションの成立の可能性を断ち切ることにつながるおそれがある。

言語認知機能の獲得過程を、関係障害臨床の視点から捉え直すことによって、社会情緒的発達と言語認知的発達の関係について新たな視点を提示した。なおここで述べた筆者らの理論的基盤をもとに実践している関係障害臨床の具体的事例を通した治療論については別稿で論じる予定である（小林，印刷中）。

本研究は東海大学健康科学部特別研究費（1998）によって行われた。

引用文献

Condon, W. S. (1989). Neonatal entrainment and encapturation. In M. M. Bullowa (Ed.), Before speech: The beginning of interpersonal communication. (pp. 131-148), New York, Cambridge University Press. 鯨岡峻・鯨岡和子（訳）(1989). 母と子のあいだ. (pp.239-258)、京都、ミネルヴァ書房.

Dawson, G. (Ed.) (1989). Autism: Nature, diagnosis, and treatment. New York, Guilford. 野村東助、滑水康夫監訳（1994）、自閉症－その本態、診断および治療. 東京、日本文化科学社.

Kandel, E. R. & Jessell, T. M. (1991). Early experience and the fine tuning of synaptic connections. In E. R. Kandel, J. H. Schwartz & T. M. Jessell (Eds.), Principles of Neural Science, Third edition. pp. 945-958, New York, Elsevier.

Kaye, K. (1982). The mental and social life of babies. London, Mathuen. 鯨岡峻、鯨岡和子訳 (1993). 親はどのようにして赤ちゃんをひとりの人間にするか. 京都、ミネルヴァ書房.

小林隆児(1998). 母と子のあいだを治療する－Mother-Infant Unit での治療実践から－. 乳幼児医学・心理学研究、7、1-10.

小林隆児(1999). 関係障害臨床からみた自閉症理解と治療. 季刊発達、78、22-35.

小林隆児(印刷中). 乳幼児期の自閉症圏障害に対する早期介入－自閉症の関係障害臨床－. 別冊発達（渡辺久子・橋本洋子編）特別企画「乳幼児精神保健の新しい風」、24.

小林隆児(印刷中). 母と子のあいだを治療する－自閉症の関係障害臨床－. 京都、ミネルヴァ書房.

小林隆児・白石雅一・石垣ちぐさ・中澄襟子・竹之下由香（1997a). 乳幼児期の自閉症圏障害における情動的コミュニケーションと母親の内的表象. 乳幼児医学・心理学研究、6、9-27.

小林隆児・白石雅一・石垣ちぐさ・中澄襟子・竹之下由香(1997b). 東海大学健康科学部におけるMother-Infant Unit の活動紹介. 乳幼児医学・心理学研究、6、31-43.

鯨岡峻（1986). 心理の現象学. 東京，世界書院.

鯨岡峻(1997). 原初的コミュニケーションの諸相. 京都、ミネルヴァ書房.

松本元(1996). 愛は脳を活性化する. 東京、岩波書店.

村瀬学(1983). 理解のおくれの本質. 東京、大和書房.

Newson, J. (1978). Dialogue and development. In A. Lock (Ed.), Action, gesture, and symbol. (pp.31-42), New York, Academic. 鯨岡峻編訳著、鯨岡和子訳(1989)，母と子のあいだ. (pp.163-178)、京都、ミネルヴァ書房.

東海大学健康科学部
紀要第5号1999
(2000年3月1日発行)

Sameroff, A. J. (1993). Models of development and developmental risk. In C. H. Zeanah (Ed.), Handbook of infant mental health, (pp.3-13), New York, Guilford Press.

Sameroff, A. J. and Emde, R. N. (Eds.) (1989). Relationship disturbances in early childhood: A developmental approach. New York, Basic Books.

Stern, D. (1985). The interpersonal world of the infant: A view from psychoanalysis and developmental psychology. New York, Basic Books.小此木啓吾，丸田俊彦監訳 (1989, 1991)、乳児の対人世界理論編、臨床編．東京、岩崎学術出版社．

Sullivan, H. S. (1953). The interpersonal theory of psychiatry. Norton, New York.

滝川一廣(1995)．小児自閉症．こころの科学、62、123-129.

Trevarthen, C. (1979). Communication and cooperation in early infancy: A description of primary intersubjectivity. In M. M. Bullowa (Ed.), Before speech: The beginning of interpersonal communication. (pp. 321-347), New York, Cambridge University Press. 鯨岡峻・鯨岡和子 (訳) (1989)．母と子のあいだ．(pp.69-101)、京都、ミネルヴァ書房．

Trevarthen, C. & Hubley, P. (1978). Secondary intersubjectivity: Confidence, confiders and acts of meaning in the first year. In A. Lock (Ed.), Action, gesture and symbol. (pp.183-229), New York, Academic Press. 鯨岡峻・鯨岡和子 (訳) (1989)．母と子のあいだ．(pp.102-162)、京都、ミネルヴァ書房．

Werner, H. (1948). Comparative psychology of mental development. New York, International University Press. 鯨岡峻、浜田寿美男訳：発達心理学入門．京都、ミネルヴァ書房、1976.

Bridging the Divide Between Socio-Emotional and Linguistic-Cognitive Development: From the Viewpoint of Relationship Disturbances

Ryuji KOBAYASHI

Department of Social Work, Tokai University School of Health Sciences

Abstract: Debate regarding the etiology of autism has undergone several transformations to date, from endogenesis, psychogenesis, to organogenesis. Today, discussion has settled around the organogenetic theory, but as yet, no consensus has been reached regarding whether the socio-emotional disturbance (disturbances of interpersonal relationship) or the linguistic-cognitive disturbance should be given primacy, or in what way the two aspects may be interrelated. In this paper, a theoretical hypothesis on the relationship between socio-emotional and linguistic-cognitive development is presented from the standpoint of relationship disturbances. The following points are raised as prerequisites to this hypothesis: 1) the need to consider the main feature of autism as problems in the process of establishing communication with the caregiver, 2) the need for detailed clarification of the acquisition process of the linguistic-cognitive function in approaching the etiology of autism, 3) the need to start from the viewpoint of relationship disturbance in order to enable this approach, and the importance of entering into the internal world (subjectivity) of both subject and caregiver through therapeutic intervention for the relationship disturbance between the two, and 4) that this becomes a possibility only through participant observation (Sullivan). Upon this understanding, the process of attaining communication is discussed taking up key concepts such as attachment, perception, emotion, and cognition, in connection with how they emerge in intricate association with the process of transformation in interrelationships.